

平成25年度

第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議

会 議 録

平成26年2月12日（水）

平成25年度 第2回 富山高等専門学校 運営諮問会議

日 時：平成26年2月12日（水）午前10時

会 場：富山高等専門学校本郷キャンパス大会議室

【会議次第】

1. 開会挨拶

2. 出席者紹介

3. 議 事

[1] 平成26年度入学試験の状況について

[2] 平成25年度進路状況について

[3] 富山高等専門学校 平成25年度 年度計画実施状況について

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 教育に関する事項

(1) 入学者の確保 P 18

(2) 教育課程の編成等 P 19

(3) 優れた教員の確保 P 20

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム P 21

(5) 学生支援・生活支援等 P 22

(6) 教育環境の整備・活用 P 23

2. 研究に関する事項 P 24

3. 社会との連携，国際交流等に関する事項 P 25

4. 管理運営に関する事項 P 26

5. その他 P 28

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置 P 28

III 予算（人件費の見積もりを含む，収支計画及び資金計画） P 28

[4] その他

4. 閉会挨拶

【出席委員】

〔敬称略、順序不同〕

遠 藤 俊 郎（富山大学長）  
松 本 三千人（富山県立大学工学部長）  
星 野 正 義（富山県中学校長会会長）  
本 望 隆 司（一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事）  
犬 島 伸一郎（株式会社北陸銀行特別参与）  
石 山 彰 雄（富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長）

<代 理>

飯 野 修（藤堂工業株式会社取締役経営企画室室長）  
（藤 堂 利 一 富山高等専門学校技術振興会会長の代理）

【欠席委員】

坪 池 宏（富山県教育委員会県立学校課長）  
黒 田 輝 夫（富山県中小企業団体中央会会長）  
金 岡 純 二（公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長）  
梅 田 ひろ美（株式会社ユニゾーン代表取締役会長）  
正 橋 哲 治（立山科学工業株式会社管理部人材開発グループグループマネージャー）

【富山高等専門学校出席者】

石 原 外 美（校長）  
丁 子 哲 治（副校長）  
成 瀬 喜 則（副校長）  
本 江 哲 行（教務主事）（本郷）  
新 開 純 子（教務主事）（射水）  
青 山 晶 子（学生主事）（本郷）  
水 谷 淳之介（学生主事）（射水）  
高 熊 哲 也（寮務主事）（本郷）  
水 本 巖（寮務主事）（射水）  
遠 藤 真（専攻科長）  
林 興 一（事務部長）  
広 瀬 浩 一（総務課長）

竹 山 富士男 (管理課長)  
松 梨 英 輔 (学務課長)  
岩 崎 紀美枝 (学生課長)  
柴 田 淳 (総務課課長補佐)  
穴 田 さおり (総務課課長補佐)  
錦 織 掌 (総務課主査)  
清 水 由美子 (総務課主査)

〔開会 午前 10時01分〕

## 1. 開会挨拶

【林事務部長】 本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

ただいまから、平成25年度第2回富山高等専門学校運営諮問会議を開催いたします。

議事に入るまでの間、進行を務めさせていただきます事務部長の林です。どうかよろしくをお願いいたします。

初めに、開会に当たりまして、本校の石原校長からご挨拶申し上げます。

【石原校長】 皆様、おはようございます。

朝早くから本会議にご出席のためお越しいただきましてどうもありがとうございます。

今日は平成25年度の第2回の運営諮問会議ということでお願いしたいと思っております。

ご承知のように、いろいろ社会の状況が変化してまいりまして、私ども学校においても社会からの要求が変わってきております。それに対応して我々も変わっていかなければいけないということが求められているかと思っております。

私どもの学校で言いますと、平成21年に富山の工高等専門学校である高専と商船が統合いたしまして、来年、もう1年年度で完成することになっております。そういう重要な節目であるということ。それから、第2期中期計画、中期目標、これが本年で一応終了して、次年度から第3期に入るといような年にもなっております。さらに、富山工業高等専門学校時代から、ちょうど今年が50周年目になり、いろいろな意味で節目になる年を迎えておりまして、ぜひ皆様方から客観的なご意見等をいただき、私どもとしても、よい方向に改善すべき点は改善していくという方向で進めていきたいと思っております。

どうぞ今日は忌憚のないご意見をお願いしたいと思っております。よろしくをお願いいたします。

## 2. 出席者紹介

【林事務部長】 本日まで出席いただいております委員の皆様をご紹介させていただきます。

富山大学長 遠藤俊郎様。

【遠藤委員】 よろしくお願ひします。

【林事務部長】 富山県立大学工学部長 松本三千人様。

【松本委員】 よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 富山県中学校長会会長、射水市大門中学校長 星野正義様。

【星野委員】 星野です。よろしくお願ひします。

【林事務部長】 一般社団法人全日本船舶職員協会専務理事 本望隆司様。

【本望委員】 本望です。よろしくお願ひいたします。

【林事務部長】 株式会社北陸銀行特別参与 犬島伸一郎様。

【犬島委員】 犬島です。よろしく。

【林事務部長】 富山高等専門学校本郷キャンパス同窓会会長 石山彰雄様。

【石山委員】 石山です。よろしくお願ひします。

【林事務部長】 富山高等専門学校技術振興会会長 藤堂利一様の代理で藤堂工業株式会社取締役経営企画室室長 飯野 修様。

【飯野委員】 飯野です。どうぞよろしくお願ひします。

【林事務部長】 なお、本日は富山県教育委員会県立学校課長 坪池 宏様、富山高等専門学校技術振興会会長 藤堂利一様、富山県中小企業団体中央会会長 黒田輝夫様、公益財団法人富山第一銀行奨学財団理事長 金岡純二様、株式会社ユニゾーン代表取締役会長 梅田ひろ美様、立山科学工業株式会社管理部人材開発グループグループマネージャー 正橋 哲治様におかれましては、ご都合によりご欠席です。

続きまして、この場に同席させていただいております本校の関係者を紹介させていただきます。

校長の石原です。

副校長の丁子教授です。

副校長の成瀬教授です。

教務主事（本郷キャンパス）の本江教授です。

教務主事（射水キャンパス）の新開教授です。

学生主事（本郷キャンパス）の青山教授です。

学生主事（射水キャンパス）の水谷教授です。

寮務主事（本郷キャンパス）の高熊教授です。

寮務主事（射水キャンパス）の水本教授です。

専攻科長の遠藤教授です。

総務課長の広瀬です。

管理課長の竹山です。

学務課長の松梨です。

学生課長の岩崎です。

その他、総務課の職員が同席させていただいています。よろしくお願いいたします。

引き続きまして、本日席上配付しております資料の確認をさせていただきます。

(資料確認——記事省略)

**【林事務部長】** 本日の日程ですが、本会議は12時を目途に協議いただく予定にしております。その後、皆様方には1階の中会議室で昼食をとりながら懇談していただきまして、午後1時に終了する予定です。

それでは、本日の議長ですが、ご選出をいただいております遠藤富山大学長にお願いしたいと思います。

それでは遠藤先生、お願いいたします。

(遠藤議長 議長席へ移動)

### 3. 議 事

[1] 平成26年度入学試験の状況について

[2] 平成25年度進路状況について

[3] 富山高等専門学校 平成25年度 年度計画実施状況について

**【遠藤議長】** おはようございます。議長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、議事は大きく3つありまして、順次進めさせていただきます。

1番目と2番目の議題、平成26年度入学試験の状況について及び平成25年度進路状況についての2点、合わせて議事をさせていただきたいと思います。

最初に、石原校長からご説明をお願いします。

**【石原校長】** では、お手元の資料ですが、11ページが入試の状況です。12ページ目はこれは表にしたものです。13ページ目が資料2ですが、まとめて進路状況ということで円グラフが載っております。14ページ、15ページが実際の就職等、卒業生の内定先の一覧です。

16ページ目をご覧いただきたいと思いますが、本科ではなくて専攻科生が修了して、その後の就職先の内定です。17ページ目は本科の学生が修了した後、大学等に編入した編入先等をまとめたもの。その17ページの下に、専攻科生が修了した後、大学院等に進学をした状況をまとめたものです。

11ページ目から17ページ目までにわたりまして、私からご説明、ご報告をさせていただきたいと思っております。

まず、11ページ目をご覧いただきたいと思いますが、表が2つございまして、その表に基づきましてご説明させていただきたいと思いますが、

上が志願倍率の推移ということで、折れ線のグラフです。縦軸が倍率です。横軸が年度です。線が幾つかございまして、それぞれの学科ごとにまとめたものと、全体を求めたものです。ですから現在6つ学科がございまして、6つの折れ線、全体をまとめたものが1つ、全体で7種類ございます。

左の平成22年度から見ていただきますと、例えば非常に高い5倍程度の倍率が少し漸減しているような状況があつて、平成26年度は4倍程度に落ちています。落ちてきていると言うのがいいのかわかりませんが、22年度が高かったということです。

もう1つのグループはそれほど倍率は高くないのですが、平成22年度に2倍前後のところのものが26年度に向けて若干増えてきているというような状況です。

いずれにしても、全国の高専との比較で申し上げますと、私ども富山高専の志願倍率は比較的高いレベルです。平均倍率でいいますと3.1倍程度です。ほかの高専等は2倍程度ですので、それに比べると比較的高い状況です。

先ほど上のグラフは倍率でまとめたものですが、下のグラフは人数でまとめたものです。先ほど申し上げたような傾向が認められると思います。

12ページ目をご覧いただきたいと思いますが、そこに表がまとめられております。上の表が平成26年度、本年度の入試の状況です。真ん中が昨年の平成25年、その下が平成24年ということです。

いろいろ細かく書いてございますが、一番左側の縦の列に学科名が、例えば平成26年度の表だけご説明したいと思っております。

学科名が左の列に6つございます。機械システム工学科から電気制御システム工学科、物質化学工学科、電子情報工学科、国際ビジネス学科、商船学科と6つの学科が書かれております。その右隣の列ですが、入学定員がございまして、いずれも学科の定員は40名です。



さらに右側、左から3つ目の欄ですが、志願者数がございませう。ここでは例えば男女で分けておりますが、機械システム工学科、本年は男性87名、女性7名、合計94名で倍率のトータルが2.4倍というように読み取ることができます。同じような形で電気制御システム工学科では男子99、女子6、合計105で倍率は2.6ということです。下の方をずっと見ていただきますと、一番高いのは上から4つ目の電子情報工学科ですが、男子133、女子24、合計157名で倍率が3.9というような形です。その下が国際ビジネス学科ですが、倍率3.6ということで、平均しますと倍率が一番下の行に書いてございませうが、入学定員240名という定員に対して倍率が3.1と、これは平均倍率です。そういったことで下を見ますと、25年度は倍率3.1、24年度は3.6ということで若干落ちているといふ言い方もできますが、3倍前後を推移しているというような見方ができるかと思ひます。

続きまして13ページを見ていただきたいと思ひます。これは進路状況についてまとめた内容です。

最初に、上の方に表が書かれております。表が2つございませうが、上の表が学科、本科の学生の状況です。下の表は専攻科のものです。

まず、上の表で見ていただきますと、左から2つ目の列ですが大学進学、その横に専攻科進学というのがございませう。さらに左から4つ目の列ですが県外就職、さらにその右隣に県内就職、その他・未定という形でまとめておりますが、そういった比率で進路を選択しているという状況です。大学院も同じような内容です。

それらを円グラフにまとめたものが2つ、カラーで示してあります。

まず学科ですが、ざっくり見ますと、大学進学94ということで、本科修了生の30%が大学へ編入学をしています。専攻科進学が50名、これが全体の16%。ですから本科修了生の46%、大学進学30%と専攻科進学16%を足した46%が、さらに勉学をするために進学等を行っています。残り約半分50%強が就職をしています。

その内訳ですが、緑の部分が県外就職です。これが91人で、ざっくり言ひますと30%、県内就職は紫色ですが66で21%というような内容です。ですから大体半数弱が進学をしているということです。これは、全国の高専も大体同じような比率だろうと思ひます。実は、80~90%大学編入をしている高専もございませう。ですが、平均的には半分程度弱ぐらいが進学をしています。

その下を見ていただきますと、今度は専攻科ですが、青地の大学院進学が8名で19%、専攻科を修了した後、大学院の修士課程に入っております。赤は県外就職ですが10名で24%。

緑は県内就職ですが23名で55%。ですから、先ほどの本科と違いまして、専攻科では進学が、ざっくり言いますと20%、残り80%が就職をしています。就職も、この場合は県内就職が多いという状況です。

14、15ページを見ていただきますと、本科の学科を修了した学生がどういった会社に就職しているかをまとめた表です。

まず、14ページにありますのは製造業です。黄色地でカラーをつけておりますが、製造業に機械工学科、電気工学科、物質工学科、環境材料工学科、電子制御工学科といったところが、一部商船学科もこういった製造業に就職をしているという状況がございます。

15ページを見ていただきますと、製造業以外にエネルギー系の電気・ガス関係の企業、情報通信、これは緑地で左側の列にカラーをつけております。青地で物流・運輸、その下にオレンジ系で技術サービス、その下は官公庁、その他ということですが、この辺は電気工学系とか商学科、これは物流・運輸系に主として就職をしています。情報工学科は緑の情報通信系に就職しているといった内訳です。

16ページをご覧いただきたいと思います。これは専攻科を修了した後、修了生がどこへ主に就職しているかを示しています。先ほど申し上げましたように、大体80%前後の学生が就職しているわけですが、やはり左の方で黄色地でカラーをつけております。製造業が機械・電気システム工学コース、表の上の1行目に本郷キャンパスと、その右側に射水キャンパスということで区別しておりますが、それぞれコース、専攻が違いますので、本郷キャンパスについてはエコデザイン工学専攻が1つございます。その中に2つコースがございます。左側に機械・電気システム工学コース、その右側に機能材料工学コース、それから射水キャンパスは3つ専攻がございます。制御情報システム工学専攻、真ん中に国際ビジネス学専攻、右端に海事システム工学専攻という形で、コースも入れますと合計で5つの列が書かれており、それぞれどの企業にどのような人数で行っているかというのを示しております。

17ページを見ていただきますと、先ほど申し上げました大学等あるいは専攻科に50%弱が進学するというところで説明いたしましたが、その内訳を示したものです。

まず、上の表ですが、左側の列が具体的に編入学をした大学名です。大学の3年生に編入をします。上から山形大学、秋田大学と、北から書かれております。筑波、東京工業大学というふうに書いてございまして、一番下に新潟工科大学まで書かれております。これもキャンパスごとに分けてございまして、右側の欄に本郷キャンパス、さらに右端に射水キ

キャンパス分があって、それぞれの学科がございます。統合した後は6つの学科になったのですが、今年の3月で最後の学生が卒業しますので、現在のところは4つ学科がございます。機械、電気、物質、環境材料、これが本郷キャンパス、射水は商船、電子制御、情報、国際というふうに分けております。数字はそれぞれ何名行ったかという人数を書いております。

その下の専攻科のところ、あまり明確になっておりませんが、若干色が変わっておりますが、薄い緑でカラーが入っております。これは、私どもの専攻科にどれぐらい入っているかという人数を書いたものです。

その下に、その他の専攻、各種学校ということで、大阪航空専門学校とか看護専門学校であるとか大原学園とか、そういったところにも若干名進学しております。

一番下の表ですが、これは専攻科を修了した後、20%ほど大学院等に進学するわけでした、その内訳を書いたものです。東京工業大学に始まりまして、一番下が大阪府立大学というような形で書いております。

そういった内容が現在の入学志願の状況と就職の状況です。

以上です。

**【遠藤議長】** ありがとうございます。

それでは、今日の次の議題 平成25年度の年度計画実施状況についてです。合わせて意見交換をさせていただきますが、今ご説明のあった26年度の入試状況と25年度の進路状況についての具体的な表の読みとか数値に関して分からない点などがありましたらご質問をお受けたいと思います。

(発言する者なし)

**【遠藤議長】** よろしいですか。

それでは、続きまして3つめの議題である平成25年度年度計画実施状況について、ご説明をお願いしたいと存じます。

**【石原校長】** 私から続けてご説明をさせていただきます。

お手元の資料のA3のちょっと大きな紙ですが、18ページから28ページまで、これは第2期中期計画、年度計画等をまとめたものです。

まず、データの構造から説明させていただいて、具体的な内容については詳細にご説明したいと思っております。

まず、18ページ目をご覧いただきたいと思います。非常に字数が多くて見づらくて恐縮

ですが、1行目に書いてあるものを見ていただきたいと思います。データの構造は皆こういう形になっております。一番左側の1行目ですが、これが第2期中期計画。私どもの学校で作成している計画です。その右隣、ちょうど真ん中の欄ですが、本年度25年度の年度計画。これは富山高等専門学校の年度計画です。もちろん高専機構全体としてのものを持っておりますが、これらが私どもの学校の中期計画と年度計画です。右端の欄ですが、具体的な事業の実施状況をまとめたものです。それで、ご説明をしやすくするために、一番左側の1行目は赤字で（A）と書いております。真ん中が（B）、右端が（C）ということで、それぞれの列を（A）（B）（C）というふうに区別させていただいております。（B）と（C）はそれぞれ対応がございます。（C）が具体的に内容を説明したもの。それから下を見ていただきますと、全体としては、2行目を見ていただきますと紫で「I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置」とございまして、教育とか研究とか地域貢献というのが入っております。これが一番大きい項目です。

Iに次いでII、IIIがどこにあるかと申しますと、一番最後の28ページをご覧くださいますと、先ほど申し上げました（A）の下から2つ目に、IIが業務運営の効率化に関する云々と。IIIが予算という内容です。これが大きいI、II、IIIです。それぞれについて小さい項目がございまして、例えばIの下に「1 教育に関する事項」というのがありまして、Iの中の小項目が1です。それについて、さらに小さい項目として黄色でマークしておりますが「（1）入学者の確保」、次の19ページ目、「（2）教育課程の編成等」、20ページ目、上から2つ目に「（3）優れた教員の確保」、21ページ目、「（4）教育の質の向上及び改善のためのシステム」、22ページが「（5）学生支援・生活支援等」、23ページ目が「（6）教育環境の整備・活用」、これが教育に関する内容です。24ページから左側に同じ黄色のマーカーがついておりますが、2番目の項目、「2 研究に関する事項」、25ページについては「社会との連携」、26ページに「管理運営」となっております。そういったことで、Iの中にも教育と研究と社会貢献と管理運営と4つあるという内容です。

それでは18ページに戻っていただきまして、説明させていただきたいと思います。

18ページ目の上から入学者の確保というところですが、真ん中の列を見ていただきたいと思います。私からは、真ん中の列の（B）を簡単に説明いたしまして、先生方には具体的に（C）を見ていただければと思っております。

まず、（B）という列の最初の欄に①②③④とございます。まず、志願者対策に関する

入学者の確保についての内容ですが、4つの対策を行っています。

①について、これを実際の業務としておりますのは、志願者対策室と広報戦略室というのがございまして、これら2つの戦略室が共同で県内の中学校を2回以上訪問をして志願者を募るようにしております。

②はWebサイトをつくっております、それを充実させていくという内容です。

③ですが、日本海にございます新潟県、石川県、福井県、京都府等の国立高専が共同で行っているサイトがございます。それが中部日本海5高専共同PRサイトです。そこで共同でPR活動しております。

④ニュースリリース等でいろいろ広報に努めているといったことが入学者確保について我々が行っている内容です。

具体的な内容については、右の列の(C)をご覧くださいと思います。

入学者確保の(A)の上から2つ目に②がございまして、そこに対する内容といたしましては、(B)の欄にありますようなものを3つほどやっております。

①は、入学説明会、学校見学会、公開講座、出前授業、こういったことを行ってPRしております。

②ですが、先ほど申しあげましたWebにQ&Aコーナーを入れて、これを活用しております。

③ですが、女子学生をできるだけ確保しようということで、少子高齢化の時代ですので、女子にも私どもの学校に入っていただきたいというような広報活動を強化しております。

その下に(A)の列で③とございますが、その中身で(B)を見ていただきますと、ここに3つございます。

学校紹介としてはカレッジガイドと学校要覧を魅力あるものに更新しております。

1つ飛ばしますが③、今年には学校の動画コンテンツを作成いたしました。これをPRの材料として活用していこうという方針です。

その下の(A)の欄の④の中の(B)を見ていただきますと①②③がございまして、①は、遠隔地での学力試験をスムーズに行うために、試験会場を遠隔地で設けて実施していること。

②は、先ほど申しあげました中部日本海5高専共同PRサイトを設けて発信しております。

続きまして19ページ目をご覧くださいと思います。

まず、左側の（A）を見ていただきますと、やはり入学者の確保ということで⑤がござ  
います。この⑤に対応するものとして（B）を見ていただきますと、①は、両キャンパス  
で統一した入試制度を実施している。

②は、高専機構でつくっております数学、物理等ですが、高専統一試験の結果を分析す  
るということをやっています。

③、先ほど申し上げました動画コンテンツを学校活動に取り込むということで、その  
効果を上げようというものです。

④ですが併願制ということで、公立の高校と本校の両方に志願を出すことができるとい  
うことを実施しております。

また、⑥ですが、専攻科の認知度向上を図るためのパンフレットを作成して配布したり、  
Webサイトの更新を行っているということです。

続きまして、（A）の欄の「（2）教育課程の編成等」というカラーでマークしたものが  
ございます。その下に①がありますが、この①に対応するものとしては（B）にあります  
ような形で2つ実施しております。

①は、制度等の問題があれば改変するということ。

②ですが、教育研究高度化ということが要請されておりますので、それに対応した専攻  
科を充実させようということで教育内容も充実させようとしております。

（A）の欄の②に対応する内容としては、（B）の列の①モデルコアカリキュラムの教  
員への周知を図り、検討を行うとしております。これはまだ継続中です。現在、モデルコ  
アカリキュラムについては、コアカリキュラムについて各分野ごと、いわゆる分野におい  
て最低限の知識や能力を身につけてほしいというものがあるのですが、モデルの部分があ  
りながらきっちりしたものがまだ明確にはなっておりません。これについては、高専機構で  
は次年度、本格的に実施するために、具体的には全国の高専の幾つかを選定して、そこで  
成功モデルを確立しようという方向で考えている状況です。

②は学位取得対策ということです。今までは専攻科を修了しますと学位授与機構に申請  
をするという方針ですが、平成26年4月の専攻科入学生から新しい認定専攻科制度とい  
うものを発足させようとしています。これは認定専攻科を出ますと、自動的に学士の資格が  
取れるという内容です。一々学位授与機構に申請をしなくてもいいということです。現在、  
全国の51高専が全部これを目指しております。これから審査が始まるという内容です。

（A）の③に対応する内容としては、（B）に3つございます。

①は学習到達度試験を実施しております。これは全国共通でっております。

②はグローバル化時代に対応するために、国際的に活躍できる人材を養成するためにTOEIC受験を推奨しております。これはかなりの割合で受けております。

③は点検評価を実施しているということです。

続いて（A）の欄の下から2つ目の④の内容としては、（B）の真ん中に3つほど、①②③がございますが、①については、授業評価アンケートを実施して、その結果についてはFD委員会や教務委員会で検討しているというものになります。

②、教員相互の授業をピアレビューし合うということをやっております。

③、学生のニーズを調査して、それを改善につないでいくということです。

（A）の一番下の行の⑤、スポーツ絡みの関係です。それに対する内容が（B）の①でA B C Dと書いておりますが、こういったことを推奨してやっております。

Aは全国の体育大会。いろいろクラブの競技大会が開催されております。

Bがロボコンです。前回、私どもはロボコン大賞というものをこれでいただいております。全国の高専の中で1位をいただきました。

Cが英語プレゼンのコンテスト、Dがプログラミングコンテスト、こういったことを実際実施しております。

具体的な成果については（C）を見ていただきますと、そこに具体的に書かれております。

続きまして20ページ目をご覧くださいと思います。上から2つ目の黄色でマークしたところ「(3) 優れた教員の確保」です。その下に①とございますが、その中身を具体的にもう少し詳細に書いたのが（B）の①②③です。

①は、基本的には公募原則で教員を募集しているという内容です。博士を持っている教員を採用するということになります。最近では、博士を取得していない方に関しては、3年任期という任期をつけて、3年以内に学位を取得して下さいということで採用するケースもございます。

②、多様な背景を持つ教員組織とするために、他機関であるとか海外へ派遣するとか、そういったことをいろいろ考えております。

③、これが先ほど申し上げた内容につながりますが、私どもの高専から、例えばお隣の石川高専へ1年間行くとか2年間行くとか、逆のケースもございます。例えば福井高専から富山高専へ来るとか、こういったことも今年ございます。

(A) の②の中身としては (B) に書いております。1 つは、私どもには①にありますような技術科学大学連携室というのがございまして、そこを中心とした形で、長岡技術科学大学とか、豊橋技術科学大学との連携を実施しております。

(A) の③を飛ばしまして④は、女性教員の確保ということを中心にしております。その内容は (B) の①②③と書いてございます。

①、全国の高専の中で幾つかモデル校を選んでおりまして、その中の一つとして私どもの高専が選ばれております。女性スマイル・アップ推進委員会というものを立ち上げておりまして、そこで女性教員の増加を試みているといったことを中心としております。その内容は (C) に書いておりますが、昨年実施した内容としては、②③として、女子大学院生等を受け入れてインターンシップをやっているということ、そういったことで女子教員確保に努めているというようなことも初めてやっております。

(A) の下から2つ目の行の⑤に移りますと、その中身は (B) の①②③④がございませぬ。

①では、本郷と射水両キャンパス共同でFD研修会をやっております。

②では、外部で開催しているような事業に積極的に参加するというようなこともやっております。

次に、(A) の⑥ですが、その中身は (B) の①②③です。

①は学生アンケート、その他いろいろ推薦等に基づきまして、顕著な功績がある教員、教員グループといった方々を表彰する。これでインセンティブを与えるような方向でやっております。

②を飛ばしまして③ですが、これは昨年から実施しておりますけれども、教員に対して今年はどういうふうな計画で教育、研究、地域貢献をやるのかということ報告といひますか、最初自分で計画をつくっていただいて、それを達成できたかどうかということを手助けするようなやり方をやっております。

続きまして21ページ目をご覧いただきたいと思ひます。黄色のカラーでマークしておりますが「(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム」というのがございませぬ。そこにも左側の欄に①から⑥までございませぬが、①について何をしているかといふと、(B) を見させていただきたいのですが、①②と2つ書いております。

①は、平成21年の統合の時点から実施した内容ですが、入学した学生に対して「ものづくり基礎工学実験」というのを、例えば4つの工学系の学科がございませぬので、その4つ



の学科共通で実施している。「技術者倫理入門」もやっていると。人文、社会、商船系、全てこういったものを展開しています。

②に、先ほど申し上げましたモデルコアカリキュラムを現在鋭意精力的に作るということで進めております。これを引き続き検討しています。

(A) の下の段に②がございしますが、その中身としては (B) に①②を書いております。

②に J A B E E の認定等が今年ございます。来年もございます。本年度と来年度に向けて、こういった内容を現在準備を進めているところです。

(A) の③を飛ばしまして、④の中身ですが (B) に2つございます。

まず、私ども富山高専は東海北陸地区の拠点校という取り扱いになっておりまして、東海北陸に8つ高専がございしますが、そこの中の拠点になる学校ということでいろんな行事をやっております。その1つが①にあります国際教育研究集会 (S P I C E) と書いてありますが、学生諸君が国際学会等あるいはシンポジウムに発表した経験のある学生を呼んで、ほかの高専の学生も、直接1つの会場に集めるのではなくて、テレビシステムを使った形で参加していただいて、経験を共有するような国際研究集会 (S P I C E) というのを定期的で開催しております。

一番下の行の⑥の中身ですが (B) に①②③④⑤とございます。

まず1つは②にありますように、技術振興会というのを私どもは持っておりまして、実は本年度非常にありがたいことですが、技術振興会の企業様の数が130から現在170まで増加しているという状況がございます。それらの企業様とインターンシップを促進したいというふうに考えておりまして、参加学生に対する支援をしているということです。

③にあるとおり、海外インターンシッププログラムをどんどん開発しているということをやっております。

そういったことを通じまして、現在どのようなことを具体的にやったかというのは、右側の (C) の欄に具体的に書かれております。(C) の欄の①②③④⑤までありますが、特に海外インターンシップということで③に、海外インターンシップに専攻科生1名云々と書いてありますが、こうした取り組みを実施しております。

また、富山県等が実施しております中国・大連等の会社でのインターンシップも行っております。

その下に③の3つ目ですが、タイのキングモンクット工科大学等へ学生諸君が2週間程度実習をしています。その下に、北アイルランドに S O U T H E A S T E R N R E G I

ONAL COLLEGEというのがございまして、そこに専攻科生6名、ほかの高専の学生も一緒に派遣をして、1カ月間のインターンシップを実施しています。その下に、ハワイ大学のカウアイコミュニティカレッジ（KCC）と書いてありますが、これまでも商船学科の学生が出かけて行く、インターンシップをやる、あるいは語学実習も含めて専攻科の学生も行ってたわけですが、これも実施しております。本年度からは工学系の学生もそこに参加できるような形を今つくっております。いろいろそういったことを展開しています。

22ページ目をご覧いただきたいと思いますが、(A)の一番上の行に⑦がございまして。これは退職技術者等にいかに協力していただけるかということに対する中身ですが、その中身としては(B)の列に①とございまして。現在、私どもの高専といたしましては、客員教授あるいはシニアフェローという肩書きで企業人材等をいろいろご協力をお願いしております。これを継続的に実施しております。具体的な仕事の内容は(C)をご覧いただきたいと思います。

⑧を飛ばしまして、上から3つ目の行、⑨の(B)を見ていただきますと、基本的にはeラーニングとかICT活用、これを上手く利用して、学生が自発的に勉強できるような環境づくりを目指しているわけです。

下の方に「(5) 学生支援・生活支援等」というのがございまして、①について、(B)を見ていただきますと、①に、両キャンパスに学生相談室を設置しております、いろいろ相談を受けています。具体的には①から⑫までいろいろ書いております。

その下に、図書購入などは学生の要望を反映して購入しているとか、その下の③に、寮の食堂等の業者一括委託ということもやっております。

(A)の一番下の行ですが、③授業料免除に関する内容です。(B)にその内容としてまとめたものですが、授業料の免除や奨学金の情報など、学生諸君に情報を流すということをご心掛けております。

続きまして23ページ目をご覧いただきたいと思います。

(A)の④、これは就職関係の内容です。就職に対する、学生に対するサービスとしては、(B)にありますように、①から⑥まで上げております。特に②にありますように、本校のシニアフェローであるとかそういう方々から、社会においてはこういったことが重要だという、いわゆるキャリアガイダンスをお願いしているわけです。

③ですが、企業研究会を開催しております。先ほど申し上げましたように、技術振興会

が170社ございますので、170の企業様がブースを構えて、両キャンパスの学生が、例えば就職を希望したい、入りたいという企業のブースへ出かけて、そこでいろいろ相談をしたり、どういうことができるのか情報収集したり、そういったことを企業研究会とっております。これは授業の一環でやっている内容です。そういったことを意識していると。具体的には（C）を見ていただければと思っております。

その下に「（6）教育環境の整備・活用」とございまして、（B）にありますように①②、施設設備等のマスタープランをいろいろ検討して、計画的に、戦略的に整備するという方針を考えています。

同じく「（6）教育環境の整備・活用」の黄色のところの左側（A）の②に対応する内容で、特に私どもがやっている内容としては、（B）に5つほど①②③④⑤とございますが、②についてはどこの学校等でも同じでしょうが、緊急度の高い施設整備について概算要求・営繕要求を行っています。

③が省エネ対策等についてやっているわけですが、特に④にございまして、「エコアクション21」という認証評価を受けているということです。これは全国の高専の中でも富山高専だけです。ですから特色のある認定を受けております。

以上、教育についての中期計画、中期目標についてのご説明といたします。

**【遠藤議長】** ありがとうございます。

それでは、委員の方々のご意見、コメント等をいただきたいと存じます。委員の方々にはパートをお願いしていると思っております。そのご意見を最初にお聞きして、その後、全体を通しての意見交換をさせていただきたいと存じます。

最初、入学者の確保ということで、星野委員にお願いしたいと存じますが、よろしくお願ひします。

**【星野委員】** それこそ日ごろから感じてはいたのですけれども、高専さんの戦略とか対策とか、本当にこういうふうにはやっておられること、敬意を払いたいと思っております。

中学校にしても毎日の子どもたちの指導ということで、学力向上対策等も関係してきて、小学校教育に、あるいは中学校は今までこうやったということであぐらをかいている部分があるかなと思っていたのですが、見習いたい部分、多々あるかなと思って見ていました。

また、周りの幾つかの高校から話を聞いてきたのですが、1つ、生徒数の減少に伴って、今後、学科等の再編みたいものがあるのでしょうか。本当に昨日か一昨日の新聞にも高校の再編が出ていたわけで、生徒数がだんだん減少していくという中で、果たして募集がど

うなっていくかなというのが将来的に気になって見ていました。

もう1つ、大学の入試等でも、いろいろな事情もあって地元志向が高まってきていると感じているわけですが、私は本当に富山県内の様子しか分からないながらも、うちの学校でも富山高専さんの本郷キャンパスあるいは射水キャンパスへ向かって行く子、それとJRの交通の便からいっても、石川高専も時たま行くわけですが、それ以外は行きたいということはない、即ち中学校卒業程度だったら保護者の意向もあり、やっぱり地元が多いのかと考えます。

また、入試に関して話が変わりますが、いろいろ対策等で統一入試のあり方を検討しておられるというので、統一となれば、当然、日も同じにしなければいけないのではないのでしょうか。中学校側として心配しているのは、調査書の様式についてです。高専さんの調査書を書くときに、少し時間がかかります。学校の教員も、今、若手が増えてきていて、調査書は、50代の教員がミスのないように念入りにチェックしています。私立高校も県立の入試の調査書に合わせていただいているのですが、そういったことをまたお願いできないかという思いもあります。

あともう1つ、入学者の確保ということで、県内中学校へ2回以上訪問していただいているということですが、2回目が10月末から12月中旬となっています。実際には11月段階でほぼ子どもたちの思いは決まってくるわけで、幾つかの学校からは、入試にかかわる各校への説明時期をもう少し早くしていただけないかなと思います。1学期に回っていただいて、そろそろ子どもたちが心を決め、保護者と話を決めてというのは11月、中学校の方でも大概高校等の入学説明会は11月頭に実施しているところが多いと思うので、高専へ向かう子どもたちのためにも、もう少し早くしていただければありがたいと思っています。

それと、前回の諮問会議でも申していたのですが、合格発表の関係で、昨年度は重なったと言えいいのか、学校の方でちょっと慌ただしくした覚えはあるのですが、今日は県立学校の方が来ていらっしゃるんですが、お願いした部分、また県立学校との日程調整等も確認していただければ、今後、大変ありがたいかなと思っております。

また、特別支援学級のことで、関係もあると思うのですが、特別支援を要する子どもたち、後ろのページで配慮していただいているとあるのですが、入学試験を受けに行ったときに、支援を要する子たちに関することをなかなかお伝えすることはできないのですが、現に入学者の中には、そういう支援を要する子は増えてきている傾向ですか。中学校では

本当に、10年ほど前、小学校において支援を要する子が増えてきたということを聞いていまして、中学校は今は大変かなと考えています。この後、高校もそういう支援を要する子どもたちの対応に大変苦慮しておられる感じは受けているのですが、その分も含めて教えていただけたらありがたいと思います。以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。大事な課題です。

今、星野委員からのご質問に、答えられる部分にご説明をお願いいたしたいと思います。

【石原校長】 私からは、最初のご質問、生徒数の減少に対してどのような考えをしているかとお答えします。これも、実は高専機構でも、51高専全ての高専で考えているところ  
です。

【遠藤議長】 答えが難しいところはどうぞ省いて下さい。検討されていることは重々承知ですから。星野委員のポイントのところをよろしくお願いします。

【石原校長】 学科の再編、再配置、それは考えています。

また、特別支援を要する子への対応ということに関しては、やはり高専はそういう学生の率が高いというデータが出ております。ほかの大学等に比べて2倍ほど多いというようなデータもあるわけです。

【遠藤議長】 特別支援で星野先生がおっしゃったのは、身体障害の方ですか。

【星野委員】 どちらかというとなんか発達障害の方です。

【遠藤議長】 発達障害の子に関しては、日本の教育界における初等教育から高等教育、さらに言えば社会共通の話題ですね。本当にどうやっていくのだろうかという思いもございますね。どうぞ、その辺も含めましてご返事をお願いします。

【本江教務主事】 補足説明させていただきます。

まず、調査書の書式について、中学校の先生から、やはりご要望がございます。私どもは、基本的に県立の書式に合わせるように常に変更してきておりますので、次年度に向けて検討をまた開始したいと思います。実際にその声はいただいております。

それと、中学校訪問2回目、12月というのは、教員の都合で12月まで遅れております。一応その前に、10月、11月中に回るようにとは言っているのですが、その辺は徹底していきたいと思います。ありがとうございます。

また、合格発表等ですが、高専の学力試験は全国统一です。今週末、学力試験がございましたが、大体今のように第3週といいましょうか、第2週の後というふうに決まりましたので、これが遅れることはございません。ですから、県立高校さんが早くならない限り、

ちょっと余裕を持てる状況を作ることが可能かなと思っております。

また、特別支援について発達障害の学生がやはり入学してきております。特に理工系については、そういう趣味が深ければそういう特性もあるということで、学校では申請をいただければ、それに対して特別なチームをつくって対応させていただいております。ただ、技術者とかビジネスパーソンという専門職になりますので、出口側のところではちょっと厳しい面は、我々の努力だけではどうにもならないところがありますが、極力その特性を支援する形は進めております。

以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。星野委員、よろしいですか。

【星野委員】 ええ。

【遠藤議長】 ありがとうございます。

それでは次に、教育課程の編成と、優れた教員の確保という話題につきまして、松本委員よりお願いいたします。

【松本委員】 高校に入ってきた1年生と、卒業する際の成人した幅広い年代の学生という子どもたちに対してどういった教育をするかというか、非常に難しいところがあるのだらうなというふうに思います。それに対してきめ細やかにいろいろされているのがよく分かり、ご努力は大変だと感じています。

それと、先ほど校長の話にもありましたけれども、社会が求めている人材に対してどう教育していくかということも含めて、非常にご苦労されているところがあるのだらうなというような感じを持っていて、この計画書、実施状況も含めてみさせていただいて、少々状況を教えていただきたいことがあります。

1つは、今の学生の自主性とかそういったものを育成していくための一つの方法として、PBL教育とかキャリア教育というのを実施されているのは非常に素晴らしいと思いますが、その評価というのは難しいのではないかなと。実際にPBL教育をやって、あるいはキャリア教育をやった後、そういった学生がどう成長したか、その辺の成果をどう評価していくかというのはものすごく難しいのではないかなと思います。我々はそういったところを悩んでいて、その辺をこちらではどういう形で今実施されているのかというのが一つ気になっているところです。

それともう1つ、学生による授業評価アンケート、これも学生が何を求めているかというか、教育の質の向上という観点から学生が何を求めて、それにどう応えていくかという

のは非常に重要なことと思うのですが、授業評価もいろいろな問題があって、単に学生の意見をそのまま取り入れて先生の教育、授業の仕方の評価を決めてしまうと問題だ、危ないということも指摘されています。それによって先生あるいはグループの評価にもつながっていきこうということなのですが、これは次のところにも絡みますけれども、それをやると、下手をすると、例えば学生にいい評価を得るような形で授業をつくってしまうというか、そういう傾向も言われているところがあります。我々もそこを悩んでいて、学生からいい評価を得るためには、少しレベルを下げたということも一つの手段として考えられる場合もあるのですが、それをやると非常にまずいケースが出てきて、そこをどうするか、学生の授業評価をどう生かしていくかというのは非常に難しいところがあります。その辺はどんな感じで進められているのかということが少し気になっているところです。

それと、先生方の授業評価に関してピアレビューという、お互いに先生方の授業を見て参考にしていくと、これは非常にできたらいいなというふうに我々も思っているのですが、これは先生方がそういう形でやれるものなのか気になります。我々も、やれたらいいなと思っているのですが、やろうとすると、多分、先生方からいろいろな反発があるのではないかとということもあり、どう進めたらいいかは悩んでいるところで、逆に教えていただけるとありがたいと考えます。

また、優れた教員の確保に関しては、これもいろいろやられていて素晴らしいと思います。特に女性教員の採用を積極的に進めていきこうということですがけれども、専門分野、例えば理工系の分野でそういう先生をたくさん採ろうとしたときに、実際は上手くいかないかなど。最近、若い理系の研究者が注目を集めていますし、中小企業なども女性の活躍を非常に望んでいるようなので、こういう方向は非常に重要なのだろうと思っています。実際に理工系の中で専門の先生に来ていただくというのは、かなり努力が必要なのではないかということで、今その辺の状況はどうなっているのかというのを教えていただければと思っています。

それともう1点、先生方の教育、研究、地域貢献とか学内環境、そういった形で先生方の自己申告になるのですかね、書いていただいて、それをサポートするような形をとられているということで、これも非常に重要な話だと思うのですが、それが何らかの形で、先生方の教育研究費等にどういう形でフィードバックされているのかをお聞きしたい。そのやり方によっては、先生方のインセンティブを高める基礎ともなるだろうし、逆に反対のことになることもあるのではないかと気もしていて、その辺のところを少し教えてい

ただければと思います。

【石原校長】 それでは、最初のご質問については本江教務主事からご説明します。

【本江教務主事】 PBLの授業評価等についてですが、やはりPBLというのは基本的に社会的基礎力などを中心に達成目標につけております。評価としては、通常の知識を図るテスト等では当然できません。基本的には社会的基礎力ということもございますが、高専生らしい技術力という、要するに技術者としての評価項目が実は8点ぐらいあります。それについては、まず発表によるポスターとか、オーラル発表により来ていただいた多様な人にいただく評価、それと、基本的にこういう授業についてはチーム学習をしますので、スタッフによる各自ヒアリング、チームヒアリングがあります。評価としましては、基本的に外部の方による各項目の評価、それとスタッフによる評価、それともう1つは、一番大切なのは自己評価と総合評価です。それぞれのチーム内での役割、貢献度、その辺をどれだけやったかというのを数値化するような形で評価しております。ですから、基本的には試験ではございません。ですから発表、ヒアリング、そして自己評価、もう1つは自己達成度があります。設定したものに對してどれだけ自分は達成したとか、そのような形で本校では評価させていただいております。

簡単ですが以上です。

【成瀬副校長】 続いてピアレビューのことですが、必ず半期に1学科の先生が3人授業をします。そしてそれに対して、その学科所属の先生はもちろんですけども、他学科の先生も授業を見て、そして評価をすることはずっと続けておまして、特にそれに対する批判というのはありませんで、むしろ例えば結構いろいろな学科がありますので、いろいろな授業を見ることができるといこともありまして、評価については、その評価をした後、もちろん授業をした人にフィードバックする。さらに学科長等とも議論をさせていただいて改善をしていくということをずっとやっております。それは継続してやっております。

【松本委員】 全員が順番にやっていくような形ですか。

【成瀬副校長】 そうですね。そういう形で今進めています。

【松本委員】 そうですか。

【成瀬副校長】 女性教員の採用比率ということに関しては、今、女性スマイル・アップ推進委員会をつくっておまして、今年度につきましては、富山大学さんにもご協力いただきました。女子学生、大学院生に対して高専をPRするセミナーを実施したり、今年か



らインターンシップ制度をスタートして、女子大学生に高専教員を体験してもらおうということ今年から始めました。そういうことを少しずつ始めて、これをきっかけに、ぜひ高専のよさを女子大学生に分かってもらって、ぜひアプライしてほしいと考えております。

以上です。

【丁子副校長】 もう1つ、このご質問は恐らくポートフォリオのことではなかろうかと思うのですが、年度の初めに、先ほど校長も説明されたように、各教員が何をやるかということ、ひとまずは校長が見て、まだ年度末に行っていないけれども、最後の3月にそれをチェックして、自己評価も含め、評価をする。例えば研究費等のフィードバックというのもございますが、校長裁量経費のようなもので申請しながら校長が判断するというようなことで、頑張っている教員にはそれなりの研究のインセンティブを与えます。

教員の表彰制度というのもありまして、所属の幹部職員が評価の高い先生を表彰するという制度もあったりして、そういうことでいろんなサポート体制、研究費、なかなか大変な時期でございます。地域人材開発本部というところでいろんなサポートというものも考えて、必要などころに必要な予算を振り分けるというようなことで、全体の活性化を上げようというような制度を設けております。

【松本委員】 先ほどは、学生からの授業評価みたいな話をどう見るかという話ですが、例えば我々も授業評価をやり、聞き方も含めて何年かごとに質問項目を見直しながらやっていますが、学生からの授業評価で、何か改善しなければいけないとか、そういう話というのは何かありますか。

【成瀬副校長】 授業評価につきましては、学生からの授業の評価をまとめて会議に出すのですが、基本的にはそれをそのままのみにするという形はとっておりません。あくまでもそれをベースにして授業改善をしていこうと、会議の中で議論をするという形で使うことがベースと思います。学生からの評価をそのまま尊重すると、先生ご指摘のような事態が起きますので、そこは気をつけてやらないといけないなと思っています。

【松本委員】 その辺は、そういう意味ではうまく回っているのですか。

【成瀬副校長】 はい。それと、先ほどのピアレビューがありますね。先生の評価というそこをうまくかみ合わせて総合的に判断していかないと、全く違う方向に行きかねないというところなんです。

【松本委員】 ありがとうございます。

【青山学生主事】 すみません。大変僭越ですけれども、20ページの女性教員の採用に関

しまして、④（C）列の②③の最後、「国立高専教員募集合同説明会に女性教員を2名派遣し」とありますが、私はその2名のうちの1名でございます。

機構から伺いました話ですと、私、津田塾大学の出身で女子大ですので、機構は都内三女大というのですけれども、津田と東京女子大と日本女子大には、とにかく決め打ちをして説明会をするそうです。この日も確かに津田塾大学の理系の学生で、情報系の学生が4人程来ていまして、院生でしたがメールをくれて、先輩としてというようなことを触れました。また、機構の理事の方のお話ですと、理工系には、「女子限定です」ということを大学側の就職支援室、学生課長、部長、そういうところとにかくどんどん情報を流して、数値目標の達成に努力をしているというお話を伺いました。

【松本委員】 公募するときも女性教員限定でこういう方を限定とするのですか。

【青山学生主事】 そうですね。やはり理工系の分野にも女子学生が進出しておりますが、なかなかロールモデルがない、身近に、結婚して出産してキャリアを続けるためにはこうだよ、あんだよと教えてくれる身近なロールモデルを皆さんが求められるので、立派な先生ではなくて、いろんなことを気安く聞ける身近な先輩を派遣してもらい努力しておられますというお話でした。ご参考になれば幸いです。

【松本委員】 ありがとうございます。

【遠藤議長】 よろしいですか。

【松本委員】 はい。

【遠藤議長】 確かに、先ほど星野委員から、入学願書を書くときの調査書のことが出ていましたけれども、私、評価というのは本当に難しいと思います。日本の国というのは、いわゆる推薦書とか調査書とか評価に関しての責任を誰が持って調査書を書いているか、評価をしているか、これが非常に曖昧な国だと思っています。調査書のことはいろいろあると思うのですが、適切な評価は非常に難しい課題ですね。

【星野委員】 そうですね。

【遠藤議長】 また、男女共同参画は非常に重要だと思っています。特に子育てと介護が問題となってきています。日本の社会体制はどうしても女性に頼っているところがあります。この辺に関するしっかりした本当の意味での男女共同参画を考えていかねばならないと思います。

大学でも、女性教員のパーセンテージ云々というのは当然課題としてありますが、専門によってずいぶん違うと思っています。今は女子大のことをおっしゃったので、まさにこ

れは女子大の強みだと思いますけど、そもそも学科によって男女の比率というのはすごく差が大きいのではないですか。

【星野委員】 ええ、そうですね。

【遠藤議長】 だから、専門領域によっては女性の教員を増やせといわれても、学生がそもそもいないわけで、この現実を見極めながらやっていかなければいけないのだろうと思います。

いろいろな努力がされているという中で、やはり女性のパワー、ものの指向性というのはすごく大事なので、ぜひ高専でもいい方向に持って行っていただきたいと思います。

1つだけ質問ですけど、高専の卒業生で高専の教員になっている、教授につかれているというのは何%ぐらいおられるものでしょうか。

【本江教務主事】 はっきりとした数字は全体ではつかんでおりませんが、結構な割合になってきております。基本的に全国の各高専では10%は超えている状況だということは確実に言えます。

【遠藤議長】 そうですか。それはすばらしいですね。富山大学で、富山大学卒業生が教授職の何%を占めているかということに関しては、多分10%っていないのではないかと思います。自校卒業生が教職につき、自分の大学を考えるのは大切なことと思っております。ありがとうございました。

それでは、次の話題は私のところですが、これは後でまとめてお話をさせていただきます。

それでは、学生支援・生活支援のところ、石山委員からお願いできますでしょうか。

【石山委員】 同窓生としては別に言うことも特にはないのですが、私らがやっていたころとは雲泥の差でありまして、よくこんなにたくさんのお金をよくやっておられる。前から言っていますが、大変ご苦労さまでございますとしか言いようがないのですけれども、学生支援の関係で言うのであれば、やはりエアコンだとかの設置の関係で環境設備をどうするかなのだろうと思うのですが、それはもうほとんど網羅されたのでしょうか。網羅されておれば、それはそれで、今の時代、エアコンもないようでは困るという話になると思います。

国立高専ということで、もともと入ってくる学生というのは授業料が安いから入ってくる人が結構おるわけですので、そのことをしっかり捉えていただいて、奨学金だとかこういうものがありますということを説明していただきたい。家はお金が少なくても、でも本当

は勉強したいという人が結構います。だからそういう人たちを救う制度というのは、国立だからできるというところがあるわけです。制度としてこういうものがありますから、ぜひ高専に来ていただきたいということを言われれば、それなりの人が入学してくる、また中学の方から希望があるということもありますので、PRしていただきたいと思います。

また、学生支援というところは、先ほど特別支援室というのがあるようで、発達障害の方を支援していくというのは大変な話ですね。その辺どうやっていращやるのかよく分かりませんが、そういう人たちも一応入学試験に受かって来るわけですので、受かっては来るけど、その後で発達障害だという話になるわけですか。

**【石原校長】** 基本的にはそうです。入学のときは分かりません。

エアコンの整備については、基本的には全部できています。

もう1つ、奨学金云々の話をご指摘のとおりで、もう少しPRしたり、あるいは専攻科生等もこれから高度化ということで人数を増やしたいと思っております。そこでは、例えば学校の方で優秀な学生に対しては奨学金を出して授業料を免除するようなことを今考えております。

**【石山委員】** 実は、国立高専というのはそういう人たちが入ってくる率が多いはずなのです。国立という意味です。

それともう1つ、できればの話ですけれども、陸上競技のOBとして一言。本郷キャンパスのグラウンドが射水キャンパスのグラウンドと比べると、さらにひどいという思いが多少ありますので、何とかならないのかという気がするのですが。

**【遠藤議長】** 大変大事なことです。環境整備をよろしくお願いします。

**【石山委員】** 今、本郷キャンパスの学生が射水キャンパスまで行って練習されているようなこともあるようです。授業が終わってから陸上競技をやろうとする人がわざわざ射水まで行っては大変な話であります。できれば予算のない中大変ですが、予算が何か1%ずつ落ちていくとかいう話もありますけれども、1%ずつ落ちていったら100年でなくなってしまふわけですので、そのうちとまるのだらうとは思っています。国の考え方としたら、高専をどうするかの話、単なるそれだけの話でありまして、減らせばいいものでは絶対ないわけで、もっと無駄なものをたくさん使っておるわけです。だからその無駄なものを削らせて高専の方に予算を持ってこさせるようなことを考えたほうが、高専というものは日本国にとって必要だからというところをぜひ考えていただいて、削ることを前提に考えるのではなくてということもぜひやっていただければと思います。

【遠藤議長】 今のご発言に関してのお答えはよろしいですか。

【石山委員】 お答えいただきました。

【遠藤議長】 分かりました。

すみません。1つ質問ですけれども、高専の授業料は普通高校と比べて幾ら違うのですか。どのぐらい安いのでしょうか。あるいは私立高校に比べていかがですか。

【本江教務主事】 高いです。基本的に今の高校3年生まで無料化になっておりますので、基本的に高専は、その掛ける2倍というふうに、概略なのですが。

【遠藤議長】 私立高校に比べては。

【本江教務主事】 私立高校よりもちょっと高いレベルです。

【遠藤議長】 なるほど、分かりました。

【石山委員】 トータルするとね、大学へ行くとかいろいろ考えていくという話なので、中学卒業生のときにその辺のところも全体考えて、では、高専へ行こうかという話になる。

【遠藤議長】 石山様のご意見で重要なところをご指摘されているのでよく分かります。最近大学を含めての授業料というのが課題になって、国立大学法人、高専も法人化されており、授業料を自由に設定できるわけです。いい授業をやるから高くするというのは可能なわけですが、諸状況を考えれば難しい問題です。また、先ほどの1%削減の話が大学においてもありました。第3期中期計画というのが平成28年から始まりますが、そのときには、国立大学法人各大学への運営交付金は約30%傾斜配分をかけて減らし、大胆な配分計画を作るという案が言われています。恐らくそのときに高専も関係してくる可能性は十分あると思いますので、その予算をどうするかという話もあります。現在国立大学の授業料は私立大学の約3分の1ぐらいのところまで来ています。逆に授業料は上げておいて、奨学金でサポートするというシステムが広がっています。国は今までの組織的な教育費の使い方ではなくて、個人的な支援に変えてきているように感じます。研究者や教員については、特別の研究をやっているデータを出している人に集中的にお金を出し、均等割にはしないという方向があります。個人をサポートするけど組織はサポートしないというお金の動きを感じます。高専が将来どういう像を描くか、高専は国立大学法人と違って全国一組織で動いていますので、ぜひいい形を残される方向の努力が必要なのだと思います。

それでは、教育環境整備、今グラウンドのことが出ましたが、本望委員、いかがでしょうか。

【本望委員】 私はあまりこの面ではここに書かれていることでも十分書かれていると思

いますので、特別にはないのですが、私なりに感じていることで言いますと、1つは、私は自分の体験から言いますと、小中学校は富山県の水力発電所に父が勤めて、その中で育っているわけですが、富山県の特性という環境から言いますと、水力発電というのをもう一度見直すといえますか、電力の地産地消というようなことを言われている面もありますので、そういうところを学校の研究テーマみたいな形で取り上げられたらいいかなというのを1つ感じています。

もう1点は、校長にも若干今まで申し上げておりますが、日本海側の海底資源、こういったものが非常に豊富にあると言われておりまして、現在探査も始まっているわけですが、そういった近辺の環境に応じたいろんな教育内容、そういうような形を検討されたらいいかなと、以上2点だけです。

**【遠藤議長】** お返事ありますか。

**【石原校長】** まず1番目の水力発電の関係ですが、今、東海北陸地区の高専で実は連携して小水力発電の、ある意味では高専間で競い合うようなことを通じて、それに取り組んでおります。今年は福井高専であって、次年度は豊田高専、富山高専という感じで順番に回しておりまして、その方向の拠点校としてリーダーシップを奮ってやっているという状況です。これを授業等にも少しずつ反映していく状況を考えております。

2点目の海底資源に関しては、何回か本望さんにもお願いをしておりまして、将来の学科再編等もやはり考えていかなければいけないということで、地域の特徴を生かすための方針としてはそういうことも考えていかなければいけないということで、今検討している。具体的といえますか、詳細に検討してみたいという状況です。

**【遠藤議長】** よろしいですか。

**【本望委員】** はい。

**【遠藤議長】** ありがとうございます。

私、教育という視点で今回ご報告いただいた数値の中で感じた点があります。

1つは、協力企業の数が130から170へ増えたこと、これはすばらしいことだと思いますし、地元の皆様方のサポートが非常に大きいということを感じます。また、専攻科の卒業生の地元就職のパーセンテージが非常に高くなっています。これは学科卒業の人は県外の方が多いの、むしろ専攻科の方々は地元非常に多く残っていらっしゃるということで、専攻科のよさが生きているものと思います。背景は分かりませんが、地元と密着した形で、の学生諸君が育っているということは非常に大きいと感じました。

研究等々の後半の部分に入ります。石原先生、よろしくお願いします。

【石原校長】 はい。それでは研究に関する事項、24ページの（B）の真ん中付近にあります。科研費等の獲得を目指す。外部資金の獲得を目指すために、（C）にあるような内容のことを実際にしております。

（A）の②ですが、地域との連携を大切にしているいろいろ取り組んでいるという状況です。具体的には（C）に活動の内容を書いております。

続きまして25ページですが、上の③にありますような技科大との連携体制ということでいろいろ組織的にはやっておりますが、ほかの県内の大学ともいろいろ協力してやっていきたいと考えているところです。

また、社会との連携、国際交流に関する事項ですが、いろいろと取り組んでいる状況はそこに書いているところで、特に先ほど来申し上げておりますが、（A）一番下の行の⑥に、いろいろ国際的な展開を目指しているということで、（C）に、①②という取組みをしております。

1つはタイのキングモンクット工科大学、もう1つは北アイルランドのSEREC、ハワイのKCC、中国の東北大学、韓国の慶熙大学、そういった国々と研究者、教員、学生交流を展開しています。今後は国際シンポジウムを開催する予定で取り組んでいるという状況です。

26ページ目を見ていただきますと、国際交流等を受けまして、（A）の⑧にありますように、留学生等を受け入れたり、あるいはこちらから出かけるケースもあります。留学生を受け入れるための施設等の整備を（C）の①②に書いております。具体的に言いますと、学生寮等をいろいろ活用すること。向こうからの学生あるいは研究者が来た場合に、そこを活用していただくというような形で研究、学生交流を進めているという内容です。以上です。

【遠藤議長】 ありがとうございます。管理運営もお願いします。

【石原校長】 管理運営26ページですが、特に不正経理に関してはいろいろ今回ございました。

管理運営に関する内容ですが、1つはもう新聞等に報告されておりますように、職員宿舍の跡地が適正にうまく使われていなかったという指摘がございました。現在、その内容については機構本部と協議中ですが、それを売り払うような形で検討しています。

もう1つは、前年度の予算で次年度のものを買ったり——「期ずれ」という呼び方をし

ていますが、前の年の年度で次の年の年度に品物が入るといようなことも幾つかございました。そういったことは、ある意味ではいけないことですので、これについてはそういうことが起こらないようにやるということで周知徹底をしたいと思っております。

もう1つございましたのは、いわゆる廃棄処分について。古くなった設備等を廃棄する際に、適切に正規の手続を経ないで簡易的にやってしまったという事例がございました。これもそういうことがないように強化してまいるつもりでおります。

27ページ目ですが、そこに書いてある内容に尽きるわけですが、特に（A）の⑤にありますように、人事交流ということで書かせていただいておりますが、（B）の①、富山大学様とは特に事務系の人事交流を進めていただいております。適切に対応、進めさせていただけることをまず御礼を申し上げたいと思っております。以上です。

**【遠藤議長】** 業務効率化の諸課題についても、今ご説明いただいたということでよろしいですね。

**【石原校長】** そうですね。全体として28ページの最後のところですが、先ほどお話がございましたⅡについては、毎年予算が削減されているということで、一般管理費では3%、その他経費で1%、効率化ということで削減が続いている。これについては、いかにして外部的な予算を獲得するかということがございまして、Ⅲにありますような形で、とにかく外部資金を獲得するというのと、社会人教育に対してどのような貢献ができるかということ、それから謝礼とか寄附金とかいろいろそういうことを絡めて、外部資金を入れられないかということを検討している状況です。

以上です。

**【遠藤議長】** ありがとうございます。それでは、ご意見をいただきたいと存じます。

初めに、まだご質問のなかった犬島委員から管理運営に関する事項など全体を見てで結構ですので、ご意見をお願いします。

**【犬島委員】** 私、学校を離れてから随分たっておりますので、見ると何か指導要領みたいな気がするんですね。一発で気がつくのは、無謬主義と完璧主義の組み合わせみたいな気がして、何か本当のところは富山高専でおやりの、こんなことをやっていますよということを、これはこれとして、当校ではこんなことをやっていますよということを主体に説明いただくほうが分かりやすいのかなという気がいたします。

2つ目に、ちょっと気になったのは、最初にご説明があった就職の状況です。今、世の中で言われているように、就労状況がものすごく破壊をされておりまして、企業側はほと



んどパートか契約で採るような形になっている。あのデータは恐らく完全雇用のものだと思うのです。そうすると、進学される方も多けれども、完全雇用で就職される方の比率がすごく高いということは大変すばらしいことであるし、また、世の中にPRすべきことでもあるのでないかなという気がします。もう一段階上げていいことがあるかという、あの就活状況です。そういうところは的確に主張されたほうがいいのではないかなと。

もう1つ、50年ということをお聞きしました。相当数の卒業生です。この活用がシニアフェローのキャリア何とかを教えるということではなくて、それも大変重要なことですが、この人たちを学校が中心になってどうチームワークとして、あるいは連携を高めるかということ別途にお考えになったほうがいいという気がいたします。何か独自にお考えになったらいかがかなという気がしました。すみません。ちょっと脱線ですが。

**【遠藤議長】** いいえ。まとめていただいてありがとうございます。

飯野様はいかがでしょう。テーマは社会連携、国際交流というところをお願いしていましたが。

**【飯野委員】** 技術振興会からの立場としてですが、意見ということで言わせていただきます。まず今、犬島さんがおっしゃいました大学生の企業のOB、卒業生の、ここをぜひ活用して、データベースを作られて、卒業生名簿とか、ちょっと話題になっていますけれども、そういったものをインターンシップとかそういったところにぜひ活用していただきたいと思います。

話の中で、振興会の会員数が170になったということなので、これからインターンシップを前端的に進められるときに、まず事前調査をされていると思うのですが、やはり企業のキャパシティをよく把握した上で、どこまで受け入れられるかということできれば一度企業を訪問した上で、やはり現場というところなので、もし可能であれば先生方にも当社も含めてぜひ現場を見ていただきたいと思いますし、それを知っておれば、そこに安心してできますし、そういった人的なネットワークづくりもこれを機会に、技術振興会を活用されてもいいですし、共同研究とかいろいろな深め方があると思いますので、ぜひ。

以前、2、3年前に富山県の工業振興会で、先生方にも夏休みの2、3日、実際その企業に行ってインターンシップしてこいといったこともありました。やはり現場が主体なので、そういったところをできる範囲で取り組んでいただけたらと思っております。

生徒さんも実際インターンシップで入ってしまうと、かなり環境が限定されてしまいますので、会社の見学会も技術振興会のネットワークを活用されて、いろんな研究室のレベ

ルもありますし、学年でやることもできますし、それはいろんな分け方ができると思いますので、ぜひ多くの企業の現場を見られるようなチャンスになるべく早い時期につくっていただきたい。やり方はいろいろと検討は必要だと思いますが、そういったところをお願いしたいと思います。

海外視察も積極的で、いろいろな提携校、大学機関、富山県、北銀さんとかその辺もそうなんですけれども、いろいろなネットワークの中でされています。そういったところで、先ほどの現場と一緒になんですけれども、私も中国に何回か訪問し、日本はやはり恵まれている国なので、例えば中国に行ってPM2.5の問題など、これも実際に経験してみても話なので、海外でトラブルといったものが大小いろいろありますが、やはりそれも現場という感覚で実際に体験してみてもいいところで、なるべく自主性がとれるように、それも数打って何ぼのものというところがあります。だからぜひ若いうちに経験させていただきたい、もっと積極的に進めていただけたらと思います。よろしくお願いします。

**【遠藤議長】** ありがとうございます。現場を大事にしろという、一言でいうとそうだと思います。やはり教員のインターンシップも大事ということですね。

**【飯野委員】** そこはね、ちょっといろいろあると思いますので。ただ、普通は会社のパンフレットを勧めて、そこで終わってしまうケースが半分以上だと思うので、やはりちょっと現場を見せてもらえますかということ言えば、コアとなる部分をみられるといいですね。

**【遠藤議長】** 私もそう思います。回数、時間は限られますが、私もできるだけ現場を訪れさせていただいています。私の専門は企業と全く無関係なフィールドなのですが、現場へ行かせていただいて、ものを見せていただきながら会話を交わすことで、多くの発見があります。発想の展開も生まれます。

**【飯野委員】** 現場に行ったら女性がどこまで作業されるかとか、そういったところも、この会社だったら女性を使ってもらえるかなという新しい発想ができますので、柔軟にそういったところを見ていただきたいと思っています。

**【本望委員】** 質問を1点ほどいいですか。

**【遠藤議長】** どうぞ。

**【本望委員】** 海外のインターンシップ等に関して、私どもの団体が海事人材育成プロジェクトの一員として参加させていただいて、我々のメンバーがハワイのカウアイコミュニティカレッジに視察に行きまして、そこで指摘された問題があります。参加できるのは、

親の経済力に左右されている面があると。お金がない人は行きたくても行けない状況があるのはどうかという意見が上がってきまして、その辺、経済的な支援という点はどうなっているのか、ちょっとお聞かせいただければと思うのですが。

【成瀬副校長】 基本的にベースは自己負担が原則なのですが、例えばJASSOといたしまして学生支援機構というのがございます。そういうところに申請をして補助をもらう、そういう努力はやらないといけないのと、あとは、基金関係をこれからどうつくっていくかというところで、サポート体制はこれからというところかと思っています。今のところ、確実性があるのはJASSOという学生支援機構等への申請というのが一番大きいかと思っております。

【本望委員】 分かりました。

【遠藤議長】 よろしいですか。本望委員には、ちょうどこのところでご質問等ご意見をいただくことになっておりましたので、それでよろしいですか。

【本望委員】 はい。

【遠藤議長】 分かりました。

今日は教育のところやはり議論の一番重要なところかなと思って、そちらの方に時間を集中的にかけさせていただいたというふうにご理解いただければと思います。

時間ではございますが、全体を見て、ご質問、ご意見、まだおありでしたらお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

【石山委員】 学科再編の予定はあるのですか。ちらっと言われましたけれども、予定はあるのですか。

【石原校長】 これは高専機構全体でやらないといけないということです。

【石山委員】 一番高専にとって重要なのは、中学校で進路指導をしている先生が高専を知っているかどうかというのが非常に重要なので、進路指導の先生というのは毎年変わったりするじゃないですか。今おられる方は高専のことを分かっているけれども、次にかわられる方は高専というのをまるっきり知らない先生が進路指導したりすると、絶対に高専に行かせるような話はしませんから、そのところ、進路指導をする人については、しっかりPRして、高専はこういういいところがあるんだということを分かった人に進路指導をしていただかないと。進路指導の先生の一言で、行くか行かないかになってしまうんです。ですので、ぜひ高専の先生が頑張っていただかなければいけない。そのPRをよろしくお願いします。

【遠藤議長】 ありがとうございます。貴重なご意見、本筋だと思います。犬島様のご意見、石山様の今のご意見も、現場を知っている方々の、高専の現場と周りの状況を踏まえて頑張れとの言葉であり、また星野委員からも厳しい的確な指摘がございました。高専のありようと将来を決める難しい時期ですので、ぜひ産学の連携について、お互いを知りながら、お互いをちゃんと理解しながらいいところを伸ばすことが必要な時代だと思います。

私は特段申し上げることはございませんが、学科再編について今石山委員がおっしゃいましたけれども、高専再編というのも視野の中にあり、特に全国レベルではあると思います。それは大学も同様に日本の教育の体制をどう考えるかという本筋にかかわる問題だと思っております。入試等々を含めまして、やはり高専の強みをしっかり生かして、アピールして、社会にさらに発展できる形をつくっていただくというのが本筋だと常に思います。弱みを何とかするよりは、強みを伸ばし、それをどうアピールするかだと思います。

こういう会議に参加させていただいて、皆様のご努力の様子を拝聴することによって本当に感謝いたします。ますます頑張っているいい形をつくっていただきたいと思います。

議事としては、これで終わらせていただいて、最後に石原先生からご挨拶をいただいて、終了させていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

#### 【石原校長】

今日は皆様方から貴重なご意見をいただきまして、本当にどうもありがとうございます。

この富山高専は全国の51高専の中でも頑張っている方の上位数校の中に入っている高専でございまして、なかなか教員も忙しくしております。先ほど犬島様、飯野様からもお話があったように、いかにしてOBを活用するかというのが非常に大事だと思っております。その方向の検討もさせていただきたいと思います。また、遠藤先生からは全体の方向性を踏まえたまとめをいただきました。どうもありがとうございました。

#### 4. 閉会挨拶

【林事務部長】 以上をもちまして、平成25年度第2回富山高等専門学校運営諮問会議を終了いたします。

どうも本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

〔閉会 午後0時09分〕